

祖母をよみがえらせた 命のサポート

【長崎県・石田雅博】

★
一般部門
入選

心筋梗塞を発症したあと、血圧が40まで降下して昏睡状態に陥り、「今夜が峠」と告げられた、97歳の祖母が、翌朝、突然目を開け、曾孫のように若くて愛らしい看護師さんに向かって「ありがとう。お礼をしますから」とかすれた声を精一杯、発した。まさに奇跡であった。

数時間前、苦しい表情を見せた祖母の背中を、その看護師さんが、ずつとさすってくれたことを、本人は無意識の中で分かっていたのだ。回復の見込みのないはずの祖母の耳元に、彼女は、そつと顔を近づけながら「苦しいですねえ。朝になったらエアベッドに換えてあげますからね」と、優しく語りかけた。それは、病院に泊り込んだ家族の絶望に一筋の明かりをともした救いの言葉でもあった。

今からもう40数年前、私が小学3年生の時のことだ。脚を骨折して入院していた間、祖母は、孫が遅れをとらないようにと、自ら幼いクロスシートと一緒に毎朝、学校に通い、児童用の小さな椅子に大

きなお尻をペンと腰掛けて、終日、先生が書く黒板の字をノートに書き写してくれた。この通り、人並み外れた行動力の持ち主で、周りの人に施しをすることが大好きであつたが、反対に人からの施しをそのまま受け取ることができない、昔かたぎの律儀な人でもあった。

あの夜、祖母は三途の川の岸边に立っていたに違いない。命が尽きようとする瞬間、当直の看護師さんの、安らぎを与える命のサポートに接して、そのまま黙つてあの世に渡ることができず、「ありがとう」というこの上なく美しい感謝の言葉を伝えるために、わざわざ戻ってきたのであろう。

それから一週間余り延命できたお陰で、祖母は、縁のあつた一人ひとりにお礼の言葉を残して、最高に幸せな人生の幕を閉じることができた。それはあの日、祖母の命をよみがえらせてくれた看護師さんの、魂に響く看護があつたからにはかならない、と私は思っている。